

民謡に關する論文

前田いさむ

体系なき集団運動のことである

オーロラの様に

土屋龍二

大圓周を描くと

彼女は開かれたレターへ

顔で益された眼で

彼女は頬杖を突いて

ほつれ毛を頭はして

小学校の地圖で茶色に染

めた部分に

駒鹿と混つて彼女の顔が

彫刻されてる

私の耳は潜水服を着て魚

のひれ音を聞いて居る

公園

太陽の息吹を

擦り抜けて

池の上に切手をはる

オーヴァとショールが

冬の陽差しは木々の間を

私ほどで民謡が文學自

由來ないばかりでなく却

も尚かゝる謡つた口吻を残

す青年男女があるのでは

よ水潤るゝ

や水潤るゝ

と庭描く父の息白

一衛

二三侯堂の上に年貢米

砂利取りのかけし渡し

日々と庭描く父の息白

一衛

草紅葉

好問石雞忘年

句會

秋の風(辨天池)

裏坂の冷やかにある

光寺春秋の彼岸花を期し

し壇のごみ切れであつた

取れるあてのある得意先

伊左衛門は勘定の確實に

て來り詰づる善男善女の群

は、げにエバナレムの聖地

か贈られた進物の中味は御

三ヶ月でも待つてやつたが

に詰づる巡禮のそれの如く

やに通しと稱して一本の種の悪い得意先の勘定と

であつた

梵鐘に明り、梵鐘に暮れ

る水内町は信仰の町であつ

たこの町の大通りに吉田屋

伊左衛門と呼ぶ造家があ

がない。何の音を聞くより

別問題である

次に藝術民謡の運動は

一つの運動でなくてはならぬ

しかしそれは文學運動では

活感情を民謡体を以て表現

なくして、歌謡運動でなく

したものとの二種がある。

したものが、愚見

述べられたもののが愚見

に従へば、「自分自身の生活

もはや世は個人の時代では

感情を民謡体を以て表現し

しないからである。更にそれ

たもののがどうして民謡と

は体系のあり方法のある運

ではないか。然るに今日で

呼べるだらうか。それが若

い呼べるなら、營業を

して悉く民謡とはそれ

ではないか。しかし呼べる

たものではないが、民謡と

は体系のあり方法のある運

ではないか。然るに今日で

呼べるだらうか。それが若

い呼べるなら、營業を

して悉く民謡とはそれ

ではないか。然るに今日で

